

◎私の座右銘◎

海外生活で学んだ 寛容の精神

私の人生を振り返った時、いくつかの重要な出会いがありました。

最初は学生時代の合気道との出会いです。そのおかげで在学中に合気道部北米派遣団の一員として二か月間アメリカ各地の大学を回って学生と交流する機会に恵まれ、さらにその時の縁でアメリカ人が経営する道場に招かれて一年間合気道を教えるという得難い経験もしました。前の東京オリンピックの頃です。これで自分の中の世界が一気に広がりました。

将来は国際公務員としてパリのユネスコ本部で仕事をしようと文部省（現在の文部科学省）に入省したのも、この時の海外経験が大きく影響しています。

外国に出ると、自分が日本人であることを強く意識するようになります。自国について語れない人は尊敬もされず、信頼もされないのです。外国生活の中で日本人としての誇りと自信を失わずにいられたのは、合気道のおかげだと言っても過言ではありません。

若い頃の海外経験からは寛容と謙虚の精神も学びました。ユネスコでは世界各国から歴史も文化も言語も異なる多様な人たちが集ま

って仕事をしていますから、その中では互いの違いを認め合い、理解し合うことが何よりも重要になってくるのです。私は文部省に戻ってからもできるだけ外部の人たちとの接点を大切にして、多様な意見に耳を傾け、物事を多角的な視点から眺めるように努めています。

文部省では主に大学改革の仕事に携わりましたが、日本の大学の問題点の一つは学問領域の細分化が進み、自分の狭い専門分野以外のことに目が向かなくなっていることです。富士山が広い裾野で支えられているように、専門知識も幅広い学問、あるいは教養に支え

センス・オブ・ プロ・ポーション

日本空手協会会長

草原克豪



くさはら・かつひで——昭和16年北海道生まれ。東京大学教養学部卒業。コーネル大学経営行政大学院留学。ユネスコ本部勤務を経て文部省で高等教育局審議官、生涯学習局長を歴任。退官後は拓殖大学副学長兼拓殖大学北海道短期大学学長などを務める。平成27年日本空手協会会長に就任。著書に『武道文化としての空手道』（芙蓉書房出版）。

られていなければなりません。私はそのような問題意識を持って仕事に取り組みましたが、いま思えば、バランス感覚というものを強く意識していたのかもしれない。

そのバランス感覚の重要性を百年以上も前に強調していたのが、『武士道』の著者として知られる新渡戸稲造博士です。書物を通しての新渡戸博士との出会いは、私にとってその後の人生を変えるほどの大きな出来事となりました。

新渡戸博士は第一高等学校の校長として、学生たちに「センモンセンスよりもコンモンセンス」、つまり専門よりも常識を身につけることの必要性を訴えました。もちろん専門が重要ではないという意味ではなく、専門知識と幅広い教養の両方が必要だと言っているのです。

もう一つ、一高生の心を捉えた言葉で、私が一番好きな言葉に「センス・オブ・プロポーション」というのがあります。釣り合い感覚といった意味でしょうが、小さいものは小さいものとして捉え、大きいものは大きいものとして捉えるということで、要はバランス感覚です。

このように「幅広い教養」と「バランス感覚」を重視した新渡戸博士の生き方に、私は大いに共感したのです。それが昂じて、多方面で活躍した博士の全体像を描いた伝記を書くことになり、『新渡戸稲造 1862-1933』として上梓しました。

「武道文化」を 定着させるために

私自身は空手の修行はしていません。それでも空手とは縁があって、文部省では空手部の部長を頼まれていましたし、拓殖大学に勤務した時も空手部の部長を務めていました。

二〇一四年に日本空手協会から理事への就任を要請された時も、一理事ならばと思ってお受けしました。ところが、翌年になって、それまで三十年間協会を牽引してきた中原伸之会長が退任されることになり、選考委員会で審議した結果、私が後任の会長に選出されたのです。全く想定外のことでした。

空手をやったことのない人間が会長になっていいのかと不安はありましたが、断ることもできず、逆に全国の指導者との間で先輩後輩というしがらみがない分、かえって公平な舵取りができるかもしれないとも考え、覚悟を決めてお引き受けることにしました。

空手はいまから百年近く前の一九二二年、船越義珍先生が沖縄から上京して指導を始めたことから全国に広まったのですが、船越先生の功績は単に空手を本土に紹介しただけでなく、沖縄の唐手術を日本の武道として空手道へと発展させたことにあります。

武道ですから、空手を学ぶ人は単に技を身につけるだけでなく、日本古来の武術の伝統を踏まえ、武士道精神を大事にしなから稽古に励む必要があります。もちろん試合で勝つ

ことも一つの目標には違いありません。しかし、武道の究極の目的は相手に勝つことではなく、「己に克つ」ことなのです。

日本の武術はもともと相手を倒すための殺法として発展してきたのですが、時代を経るにつれて武將たちは「戦わずして勝つ」ことを目指し、和の心を大切にしようになりました。さらに江戸時代になると、武士はもはや戦う戦士ではなく、徳をもって政治を行う支配階級となったのです。そこから新しい武士道の概念も生まれてきました。現代の武道はそういう伝統を受け継いでいるのです。空手道で「空手に先手なし」、合気道で「武は愛なり」、柔道で「精力善用、自他共栄」を説くのもそうした考え方の表れです。

つまり、武道は技術面だけでなく、精神面、健康体育面も含めて一つの文化としての側面を持っているのです。その意味で、グローバル化する世界の中でいま日本に求められているのは、「武道文化」という概念を定着させ、発信することではないかと思っています。

日本空手協会は全国九百か所の道場と四万人の会員から成り立つ大きな組織で、この組織をまとめるには何よりも会員の理解と協力が不可欠です。そのためにも私自身がバランス感覚を大事にし、中立かつ公平な運営を通じて会員の信頼を得るよう心掛けなければなりません。その上で武道文化としての空手道の発展を担えるよう尽力するつもりです。